株式会社 タクミ電機工業

差別化を目指して行き着いた「木質バイオマス発電」

大館市に本社を構える株式会社タクミ電機工業。一般家庭や法人の電気工事から、太陽光発電事業も行っており、本社のほかに秋田市、盛岡、北上、札幌、八戸に営業所がある。今回は、同社が取り組む事業のひとつ、バイオマス発電事業について代表取締役の伊藤拓美さんにお話を伺った。

代表取締役
伊藤 拓美

株式会社タクミ電機工業
〒017-0855
大館市櫃崎字大道下14-3
TEL：0186-59-6811
FAX：0186-59-6821
https://takumi-denki.com/
HP

副産物も活用した発電の仕組みを追求

株式会社タクミ電機工業は、平成18年4月の設立以来、電気設備の設計・施工を行っている。一般的な電気工事のほか、当時全国規模での整備が行われた光回線の工事施工に参加し、アナログ放送からデジタル放送への移行に伴う基地局工事を請け負うなど、新たな分野への挑戦を続けてきた。平成25年に再生可能エネルギー事業として太陽光発電建設工事の参入を果たし、自社で太陽光発電所を建設。平成27年に岩手県洋野町にてメガソーラーの電気工事を行うなど、着実に実績を作り、成長を遂げている。

同社が平成28年から取り組んでいる分野が『木質バイオマス発電事業』だ。木質バイオマス発電は専用の設備で乾燥させたチップを発電機で炭化させ、生まれた木質ガスによってモーターを動かし、発電を行うというものだ。

「バイオマス発電は、電気と熱、そして炭が排出されます。熱は木質チップを乾燥させるエネルギーに、炭は土壌改良材として農家に販売しています。できるだけ無駄を省く努力を行い、カーボン・ニュートラルの先、カーボン・マイナスを実現させることができました」。

新たな事業を通じて山の大切さを知る

当時は全国的にも、参入事業者が少なく、バイオマス発電への可能性を感じたことが大きな理由だった。木を学ぶ中で山と林業に対する興味が伊藤さんの中に芽生えていった。

「木を育む山について勉強し、林業の大切さを知ることになりました。木を植えて伐採するという先人たちの森林の手入れ。これは80年のサイクルで行われ自然環境を守ってきた。近代になって海外から価格の安い木材が輸入され、そのバランスが崩れてしまった。現在、大館市には林業に携わる人が15名しかいないそうですが、市の山地面積を考えると人手不足は明らか。山に手を入れ、木を間引かなければ、木は朽ちる。朽ちた木はCO_2を排出してしまう」。

「林業が儲かる職業にならなければ、山は廃れてしまうし、自然環境も破壊されたまま。今は木質チップを仕入れて事業を行っているが、将来的には自社で林業活性化に繋がることに挑戦できたらと考えています」。

バイオマス発電にはフィンランドのメーカーである『VOLTER』の発電機を8基稼働。

バイオマス発電機で発生した熱源をうまく利用して、木質チップの乾燥する熱源に変えている。

木質チップから発生する『おがくず』から木質ペレットやブリケットという『成形された薪』を製造。